
風を歌おう

黒ヒジキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風を歌おう

【Nコード】

N5759B

【作者名】

黒ヒジキ

【あらすじ】

リータはおばあちゃんと二人だけで暮らすちいさな女の子。ある日、風の歌を聞いたリータは、おばあちゃんに聞かせたくて、歌えるように頑張るのです。童話風物語。

むかしむかし、ある小さな村に、おばあさんと二人だけで住んでいる女の子がいました。
名前はリータといって、とても歌が上手な女の子です。

ある日のことです。

リータが森に遊びに行きますと、歌が聞こえてきました。

さわさわさわわ

さーわさわ

(だれがうたっているのかな？ どこでうたっているのかな？)
歌っている人をさがしてリータは森を歩きます。
ですが、森はとても広いのです。
それにどうしたことでしょう。

このうたは森のいろんな所から聞こえてきます。
きらきらゆらめく木の葉たちや、お日さまにぽかぽか暖めてもらっている土、ゆらゆら揺れる草。

そのどれもが声をそろえてうたっているようでした。

さわさわわびびび

さわびびびび

(わ、かぜさん、つよくなつたよ。このうたで、おどってるみたい。わたしもうたえるのかな？ かぜさんのうた)
リータは歌っている人を探して、あっちへふらふら、こっちへふらふら。

どんどん森の奥に入っていきます。

ですが、森の奥は怖いところです。

森の奥に近づけば近づくほど、木の葉たちや、土は冷たくよそよそしくなってしまう。

それは『俺たちの大切な場所だぞ。人間なんか入れてやるもんか』
ということなのかもしれないし、『どうぶつたちの大切なかくれ場所なんだよ。入って来ちゃダメなんだよ』ということなのかもしれない。もしかしたら『危ないんだよ』と教えてあげているのかも。

深い深い森の奥は大きな木がじやまをして、お日様があまり差さないで、薄暗いのです。それに、意地悪な妖精さんが住んでいて、なにも知らずに入り込んできた人を、迷わせて帰れなくしてしまったりもするのです。

そんな森の奥に入りこんでしまったのにも気づかず、リータは風さんの歌をたどっていきます。

ときおり、くるくる同じ所をまわったり、急に曲がったりするのでとても大変です。

（かぜさん、たいへん。こんなにいろいろくるくるあっちこっち。でも、かぜさんのとおりみちをみつけたみたい。）

一生懸命に、風さんの歌を追いかけていると、とつぜんぽかぽかなお日様が顔を出しました。きらきら輝くきれいな場所です。

小さな小川がさらさらながれていきます。風もおだやかに吹いています。

ひゅうひゅうひゅう

さわさわさわわ

そよそよ

さらさらさら

（うわあ。かぜさんのうた。ふえた。かわさんのおうたも、ふえた）

ぐんぐんさらさら
さわさわぼかぼか
さあさあかさかさ

(なんでかな? たくさん、いろんなおうたがきこえるよ。きさん、かわさん、かぜさん、おひさま、くささん、ほかにもいっぱいいたがある)

それでも、一番はつきり聞こえるのは風さんの歌です。

でも、とリータは首をかしげました。どうしてこんなにたくさん歌があるんだろう?

うんとたくさん考えましたが、答えはできません。

それにお日様がどんどん下がっていつてしまいます。

お日様もそろそろオレンジ色になり始めています。

早く帰らないと夜になってしまうので、大慌てでリータはおうちに帰りました。

おうちに帰ったリータは大好きなおばあちゃんに今日の出来事を話しました。

「おやおや、それはすごいねえ。私にも聞けるかねえ?」

そう言つて、おばあちゃんはにっこり笑って頭をなでくれました。

「きつときけるよ! ばしょ、おしえてあげる。すぐちかくだよ!」

「おや、本当かい? それじゃ、明日にでも教えてもらおうかね。

おばあちゃんも明日は暇だし。ピクニックだ。お弁当も持っていこ

うね」

「うん!」

リータは笑顔で答えました。

次の日、約束通りおばあちゃんと一緒に森に行きました。

辺りには今日も風の歌が響きます。

さわさわさわわ
がっさがっさぐんぐん
ぼかぼか

昨日よりもいろいろな歌が増えたようです。

「ここがそうなのかい？」

おばあちゃんは少し困っているようです。

「うん、そうだよ！ きょうは、いろんなうたがきこえるよ」

おばあちゃんは少し困った顔をしています。

「おばあちゃんには、聞こえないの？」

おばあちゃんは困ったように笑い、そして、ゆっくり、悲しそうな顔で肯きました。

（こんなにたくさんうたってるのに）

リータは悲しくなりました。でも、この歌ではおばあちゃんの耳には小さすぎるだけなのかも知れません。おばあちゃんは最近耳が遠くなったとよく言っていますからね。

今度はリータはあの小川までおばあちゃんを案内しました。

ここではとても大きな声で歌っています。

ここなら。そう思っておばあちゃんを見てみましたが、やっぱり困った顔で笑っていました。

「やっぱり、聞こえない？」

「残念だけどねえ」

リータはとても悲しくなりました。きつと嘘つき、と思われたに違いありません。

そんな悲しそうな様子のリータを見て、おばあちゃんは明るく声をかけました。

「そんな悲しそうな顔するな。ほら、たまたま今日は聞こえないだけかも知れないじゃないか」

そんなことはありません。リータにはとてもはっきりと聞こえています。だけど、リータは心配させたくなかったので肯きました。

「ほら、お弁当にしようじゃないか。お腹減つたらどう?」
「うん」

リータは無理矢理笑顔を作ります。

「それに、とても気持ちの良い場所じゃないか。こんな所を教えてくださいただけでも大満足さね」

そう言つて、おばあちゃんはお弁当を広げました。

次の日、リータは丘に行きました。

この丘は村のすぐ近くにあり、天辺には大きな木が一本だけ立っているのです。

リータはその木に登つてみました。

「リータ! 何してんの?」

同じ村に住む子供達が声をかけてきました。

「かぜのうたを、きいてるの!」

そう言つと、彼らは笑いました。

「風の歌なんて無いよ。嘘つきだ!」

「そうそう、嘘つき!」

「リータの嘘つき!」

「ちがうもん! うそつきじゃないもん!」

でも、風の歌を聞いたのはリータだけで、他の人は誰一人として

おばあちゃんですえも聞くことが出来ないのです。

嘘つきって言われるのも仕方ないかもしれません。

ですが、リータにはこんなにもはつきり聞こえるのです。これが嘘だなんてリータには信じられませんでした。だから、リータは自分は嘘つきじゃないと言いつけました。

それでもやっぱり、みんなは信じてくれませんでした。

「みんなひどいよ! わたしうそいつてないのに、みんなうそつきつていうの!」

その夜、みんなに嘘つきといわれたリータはおばあちゃんに泣きつ

きました。

おばあちゃんは優しくリータをなでてくれます。

「だけど、誰にも聞こえないんじゃないかねえ」

「おばあちゃんも、うそだ、っもおもってるの?」

「そんなことはないけど……………。そうだ!」

おばあちゃんは何かひらめいたようでした。

「リータ。お前が歌ってくれないかい?」

リータは顔を上げました。

「お前は歌が得意なんだろう? だったら、お前が歌っておくれ。

おまえが私に風の歌を教えてください」

そうおばあちゃんは言いました。

そうです。みんなが聞けないなら、私がみんなに教えてあげればいいのです。

リータは嬉しくなって、涙を拭きました。

「うん! たくさんれんしゅうして、うたえるようになるから、きつときいてね!」

と、約束しました。

次の日、リータはあの小川に行きました。

そこで練習を始めます。

「さわさわさわさわ さーわさわ」

風はそよりとも動きません。どうも何か違います。

もう一度風さんの歌に耳を傾けます。

さわさわさわさわ

さーわさわ

さわさわざざざざ

ざざざざざざ

やはり違いました。もう一度初めからやり直し。

「さわさわさわ ささわさわー」
やっぱり風さんはリータの歌には踊りません。
もう一度、風さんの歌を聴き直します。

さわさわさわさわ
さーわさわ
さわさわどどどど
さわどどどど

また、違います。それなら今度はしっかりと聞いてから練習しよう
とリータは耳を澄ませました。

さわさわさわさわ
さわどどどど
さあさあさあさあ
ひゅーひゅーひゅー

そしたら、風は違う歌を歌い始めました。風の吹き方も変わって
います。

リータは少しいらだちました。

（なんでおんなじうたをうたわないの？）

でも、相手は風です。風は昔から気まぐれなんだという話を、おば
あちゃんから聞いたことがあります。

どうやら、根気強く聞き続けるしかないようです。

その日の練習はあまり進みませんでした。

次の日から、しばらくリータは朝早く起きていろいろなところを歩
き回りました。

あの河原より良く風の歌が聞きとれる場所を探すためです。

畑のそばの丘の上やその一本杉の上、町へ行く道、教会の屋根の

上（これは神父様に怒られてしまいました）、村の家の屋根の上（いろんな人から怒られました）、森の入り口や広場など、たくさん所で耳を澄ませましたが、どこもあまり良い場所ではありません。なぜなら、どこもうるさくて風の歌が良く聞こえないのです。

一通り探したところで、結局最初の小川に戻ってきました。

どうやらここが一番良いようです。ここでなら風の歌が一番きれいに聞こえるのです。

結局、リータはここで練習することにしました。

それから毎日リータは小川に通いました。

何度も行くうちにいろいろな発見があります。

たとえば近道がそうですし、きれいなお花や、おいしい果物になる木だったりもしました。

新しい歌も見つけました。

そして、がんばればがんばるほど、いろいろなものから、いろいろな歌が聞こえるようになっていきました。

畑のそばを歩いていけば、お野菜の歌が聞こえますし、村の中ならレンガの歌や、ワラの歌。火の歌も聞こえてきます。

風の歌も、どこにいても聞こえるようになりました。

でも、リータは少し困ってしまいました。

なぜなら、あんまりにもあちこちから歌が聞こえてきてしまうので、聞きたい歌だけをきくことが難しくなってしまうのです。

（どうすればいいのかな？）

こういうときはおばあちゃんに聞くのが一番です。

「おや、それなら神父様に聞くのが良いじゃないかね。あの人はいつもいろいろな歌の中から一つを聞くよ」

そうでした。神父様は聖歌隊の指揮者をしているのです。

何人もの人の中からずばっと一人のズレをわかるんですから、きっと良い方法を教えてくれるに違いありません。

「おばあちゃん、ありがとう！」

そう言つてリータは教会に駆け出しました。神父様はいつも教会で悩みを聞いたり、ケガや病気をなおしたりしているのです。

神父様はいつものように教会にいました。いつもどおり、お話を聞いたりしています。

「しんぷさま。ききたいことがあるんです」

「おや、リータちゃんじゃないか。どんなことが聞きたいんだい？」神父様はにこにこ笑顔で聞いてきました。

「あのね、おうたがたくさんで、ききたいおうたが、ききとれないの。どうすればいいのかな？」

神父様は、ふうむ、とあごに手を当てて考えました。真剣な顔です。やがて、あごから手を放したと思うと、こう言いました。

「聞きたいお歌の音に、じつ、と耳を澄ませるようにするんだ。そうすれば聞き取れるんじゃないかな？」

むっ、とリータはむくれます。そんなことはとつくに試していたのです。

「わかっているよ。そんなことはもうやっているんだろう？」

リータはうなずきました。

神父様は苦笑いして、優しくさとすようにリータに言いました。

「でもね、一生懸命練習しないとわからないんだよ。私もたくさん練習してようやくいろいろ分かるようになっただよ」

リータはなるほど、と思いましたが、たしかに簡単に出来ることではないのです。だから練習していたんじゃないやありませんか。

リータは、がんばりもしないでダメだとあきらめた自分がとても恥ずかしくなりました。

同時に、もっとがんばろうという気がしてきます。

「ありがとう！ しんぷさま！ わたしもう一回がんばるね！」

お礼を言つてリータはあの河原に向けて駆け出しました。

「頑張るのは良いけれど、夜までには必ずお家に帰るんだよ！」

神父様は優しく見送つてくれました。

リータはいつもの小川のそばででじつと耳を澄ませてみました。いつもとおなじように、たくさんのがが聞こえます。

ですが、なかなか聞き取れません。

(しんぷさま、やっぱりわたし、だめなのかな……)

リータはちよつと弱気になりました。

ですが、すぐに首をふつてその考えをすてました。始めたばかりで急にできるわけがありません。

ここはじつとガマンの子です。一生懸命がらなければいけません。

神父様だつて一生懸命がらばつて今みたいになつたのです。

神父様の半分もしてないのにあきらめたのでは、なんにもなりません。

おばあちゃんとの約束だつてあります。リータが聞かせてくれるのをきつと楽しみにしているはずです。

(よし、やるぞ！)

ばんつ、と自分のほつぺたを両手でたたいて気合を入れました。

それから、毎日この場所に来て、歌を聴く努力をしました。

だんだんと聞き取れるようになってくると、今度はその聞き取れた歌を練習しました。

神父様のアドバイスで、楽譜に書き起こしたりして忘れないようにしたりもしました。

面白いことに、風さんの歌を練習すればするほど風さんと仲良くなれる気がしてきます。

そして、リータがついに風さんの歌を完全に歌えるようになります。リータの歌に合わせて風が踊るようになりました。

(やったよ。うたえるようになったんだ！)

リータは飛び上がつて喜び、おばあちゃんの所へ走つていきました。

「おばあちゃん！」

リータのおばあちゃんがいつものように、暖かな窓辺で繕い物をしていますと、リータが飛び込んできました。

「おや、リータ。そんなに慌てて、どうかしんだい？」

飛び込んできたリータはとても嬉しそうです。

「えへへ、うたえるようになったんだよ。かせさんのうた」

「まあ、本当かい？」

「うん！」

そこでリータは一步下がってぴよこんと御辞儀して、歌い始めました。

さわさわさわわ

さわさわさわわ

おばあちゃんは驚きました。とてもふしぎな歌声です。まるで、本当に風のよう。

気づけば、おだやかに風が吹き始めていました。

さわさわさわわ

さーわさわ

風はいつしか狭い家を出て、外に向けて吹き始めました。

その風に乗って、リータの歌も外へ広がります。

村にいるみんなの手が思わず止まり、リータの歌に聴き惚れました。

やわらかな風が村中を通り抜けて、遠くまで広がっていきます。

リータは一生懸命に歌います。

やがて歌が終わりました。それまで吹いていた風も止まりました。

ぱちぱちぱちぱち

おばあちゃんが拍手しています。

気づけば、信じていなかった子達も窓から覗いていました。

彼らも拍手してくれています。
リータは御辞儀して応えました。

おしまい

(後書き)

童話風の物語に挑戦しました。

いかがでしたか？

楽しんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5759b/>

風を歌おう

2010年10月11日16時10分発行